

ダニエル書研究序説——緒論的考察——

大 島 力

一 黙示文学について

ダニエル書は旧約聖書の中でほとんど唯一の黙示文学である。もちろん「黙示的テキスト」と呼ばれる部分は他にも存在する。イザヤ書 24-27 章、34-35 章、65-66 章、ゼカリヤ書 9-14 章、ヨエル書などである。しかし、文学類型として黙示文学と言いうるのはダニエル書だけである。

ただし現在もなお、「黙示とは何か」という議論は盛んに行われている。1960 年代から様々な研究が多くなされ、さながら「黙示のルネッサンス」(K. コッホ)の感を呈していた。しかし、ダニエル書をはじめとする個別研究が展開していく中で、「黙示」あるいは「黙示文学」「黙示思想」といった概念が拡散ないし多様化し、研究者の数だけ黙示思想の本質認識があるとさえ言われている。そこで、まず P. D. ハンソンの理解を参考にして、概念の整理をしてみたい。⁽¹⁾

ハンソンは「黙示」に関する議論をする際に、三つの用語を明確にわけて定義している。すなわち、Apocalypse と Apocalyptic Eschatology と Apocalypticism である。従来これらの概念が不明確なままに使われ、議論が混乱してきたと言える。その点で、この三つの概念の区別は極めて重要である。

まず、Apocalypse は文学類型としての「黙示文学」である。これは少なくとも捕囚後のユダヤ教やキリスト教が用いた類型であり、旧約聖書では特にダニエル書 7-12 章、新約聖書ではヨハネの黙示録、また第一エノク書、第三エズ

ラ書、第二パラク書などがこれに該当する。ヨハネの黙示録に基づく構成要素としては、①神から啓示が、②仲保者を通して、③幻視者に、④未来の出来事に関して与えられる、という内容である。そして、その主な機能は、選ばれた者に秘密が開示され、それによって抑圧されている者たちが慰められ、彼らがその信仰に忠実であるように勇気づけられるのである。さらに、この文学類型としての「黙示文学」に厳密な定義を与えている J.J. コリンズの見解をハンソンは受け入れている。それは「黙示文学は、啓示が他界の存在者によって人間の受け手に仲介され、終末的救済を目指す限りにおいて時間的であり、他の超自然的世界を含む限りにおいて空間的でもある、超越的現実をあらわす物語の枠を持つ、啓示文学の一類型である」という定義である。

次に Apocalyptic Eschatology、すなわち「黙示的終末論」である。これは文学類型ではなく、社会的宗教的運動でもなく、また思考のシステムでもない。むしろ、一つの宗教的パースペクティブであり、神の計画を現実世界との関係で見ていく方法である。それゆえ、ある特定の党派やセクトの専有物ではなく、様々な時代に異なった程度において個人あるいはグループが持ちうるものである。ハンソンはこの「黙示的終末論」に最も関わりが深いのは「預言者の終末論」であるとしている。「未来を、神による救済および裁きの働きのコンテキストとして見る点において、黙示的終末論は預言者の終末論の継続と見ることができる」としている。他方、両者の違いは、神の計画が現実世界の機構内部に関わる仕方で理解されているか、それとも現実の秩序から変容された秩序に救い出されるという仕方で理解されるかという点にある。後者の「黙示的終末論」は例えば、イザヤ書 65:17 などに見られる。

最後に Apocalypticism である。これは黙示的終末論に潜在しており、「黙示的活動」がその中で自らのアイデンティティーを見出し、現実の解釈をする象徴的宇宙を指している。この象徴的宇宙は黙示的終末論のまわりに結晶し、支配的社会に対抗する黙示的共同体の抵抗へと展開していくのである。このような政治的社会的状況を推測なしに正確に証拠立てることは困難であると思われるが、一例としては「クムラン文書」をあげることができる。そこには確かに

独自の象徴的宇宙が記され、それがクムラン教団のアイデンティティーを形成している。

以上のような三類型に従うならば、ダニエル書は旧約聖書の中で最も十分に展開された「黙示文学」であり、そのなかには典型的な黙示的終末論が存在する。また、後述するように現在の形態のダニエル書が、セレウコス朝シリアのアンティオコス・エピファネスによるユダヤ人迫害（紀元前 167 年）を契機に成立したことを考えると、それがマカベア戦争へと展開していく「抵抗運動」を支持する役割を果たしていたことは確実である。しかし、ダニエル書の場合は、その抵抗の仕方は戦闘ではなく、その中に示されている黙示的ヴィジョンを広めるという形を目指していたと考えられる。

二 緒論的諸問題

ダニエル書は、旧約聖書の中で最も緒論的議論が多い書物の一つである。⁽²⁾ まず第一に、ダニエルはすでに古代において「預言者」と見なされ（マタイ 24:15）、また七十人訳聖書においては「三大預言書」の後におかれ預言書と見なされている。しかし、ヘブライ語聖書においては「諸書」（ケスビーム）の最後から四番目に置かれている（エズラ書・ネヘミヤ書・歴代誌の前）。このことはダニエル書が成立した時にはすでに「預言者たち」（ネビーーム）は閉じられていたことを意味している。ただし、この点はダニエル書にイスラエルの知恵の伝統が確実に反映されているので、単に区分の問題ではなく極めて内容的な事柄にも関係している。

第二には、本文批評上の問題である。七十人訳聖書においては「ダニエル書補遺」として第 3 章に「アザルヤの祈りと三人の若者の賛歌」が加えられ、また、「スザンナ」と「ベルと竜」の物語が付加されている。これらの諸文書は明らかに現在のダニエル書が完成してから加えられたものであるが、プロテスタントにおいては「アポクリファ」に、カトリックの伝統においてはダニエル書の中に含まれている。

第三に、ダニエル書は他に類例を見ない形で、二言語で書かれている書物である。1:1-2:4aと8-12章はヘブライ語で書かれ、2:4b-7:28はアラム語で書かれている。このことの理由については多様な議論があるが、多くの研究者は1章の背後にはアラム語の原テキストがあり、それがダニエル書全体の編集者によってヘブライ語に訳されたと考えている。その意味については後述することとする。

第四に様式上の多様性の問題である。ダニエル書は様式的に二つに区分される。1-6章は基本的に「宮廷物語」であり、ダニエルは三人称で登場する。また、それぞれの章は年代的に王の名によって位置づけられている。すなわち、1-4章はバビロンのネブカドネツアル、5章はその子ベルシャツアル、6章はメディアのダレイオスである。他方、7-12章は「幻」であり、ダニエルは一人称で叙述されている。そして、年代的には一度逆戻りし、7-8章はベルシャツアル、9章はメディアのダレイオス、そして10章以下はペルシャの王キュロスの時代に位置づけられている。このような様式上の違いや不規則な年代づけは、ダニエル書の成立過程の複雑さを示している。

第五に、その様式上の「宮廷物語」と「幻」という相違が、言語上の相違（ヘブライ語とアラム語）と一致していないことも大きな問題である。ダニエル書はヘブライ語で始まり、物語の途中で（2:4）でアラム語に変わる。そして、物語が終わっても7章の幻はアラム語で記されるが、8章になるとヘブライ語に戻っている。このことはいかに説明され得るであろうか。

この点については多くの議論があるが、おそらくはダニエル書の歴史的な成立過程からではなく、ダニエル書の最終編集者の意図的な構成によるものと判断される。

三 全体構成

第1章はダニエル書全体の導入部分である。その導入部分、より正確に言えば1:1-2:4aはヘブライ語で書かれているが、それは本来アラム語で記され

ていた宮廷物語の一部であったと思われる。その部分が敢えてヘブライ語に訳されたのは、他のアラム語の物語（2：4b－6：29）と区別し、8章以下のヘブライ語の「幻」と対応させるためである。つまり現在の形態において、アラム語で書かれている物語を、ヘブライ語の部分が囲い込む構成になっている（この構成をインクルージオと言う）。

他方、様式の相違を別にして、アラム語の部分の内容に注目するならば、大変に興味深いキアスムス構成を見て取ることができる。すなわち、2章と7章は「四つの世界王国」というテーマで共通点が多く明確に対応している。2章では、「金」「銀」「青銅」「鉄と陶土の混ざり合い」がそれぞれ勃興する四つの王国を示していると、ダニエルによって王の夢が解き明かされる。それに対して7章では「四頭の大きな獣」が「地上に起ころうとする四人の王である」とダニエルに示される。次に、3章と6章は両者とも「殉教者物語」の形式をとりながら、神の力によって救われるという物語になっている。3章では三人のユダヤ人が主人公であり、6章ではダニエル自身が主人公である。さらに、4章と5章においては、ともに王の傲慢さが批判されている。4章では「大きな木の夢」の解き明かしと実現を通して、5章では「壁に字を書く指の幻」の解釈を通して王への批判がなされている。そして、両者ともに「いと高き神こそが人間の王国を支配する」（4：14、22、29、5：18－23、特に5：21）という主張が込められている。

このことは少なくとも3章から6章までの部分が、独立したアラム語の物語として以前から流布されていたことを示している。そして、そもそも文学様式の違う2章（物語）と7章（幻）によってそのキアスムスが拡大されたことは、7章以下の一連の幻が決して「宮廷物語」と無関係ではなく、密接な関連性におかれていることを示すためである。

以上のことからダニエル書の全体構成の中で7章が果たしている役割は極めて大きいことが分かる。7章の幻がアラム語によって記されていることはそのことを明確に示すためである。そのことによりダニエル書の前半の物語と後半の幻は、構造的に結びつけられているのである。

7-12章は、より明確に相互関連性をもっている。これらの章はその内容からして紀元前2世紀中葉のアンティオコス・エピファネスの支配と迫害に関心を集中させている。7章と8章は共にベルシャツアルの治世に設定されているが、それは「宮廷物語」部分と重ねて述べる文学的技法であり、幻の関心は激しさを増していくエピファネスの迫害の描写である。前述のように7章の「四頭の大きな獣」は「地上に起ころうとする四人の王」を指すが、第四の獣は他の獣と違って十本の角をもち、その角からさらに「一本の小さな角」が生えてきたと記されている(7:8)。その口は尊大なことを語り、やがて「日の老いたる者」によって裁かれるとされている(7:22)。他方、8章においても「雄羊と雄山羊の幻」の中で、雄山羊の際立った一本の角(アレキサンダー大王を指すと考えられる)の勝利と挫折の後、生えてきた四本の角の一本からさらに「一本の小さな角」が生えてきたと記されている(8:9)。これもまた強大となり、「日ごとの供え物を廃し、その聖所を倒した」(8:11)と記されている。これは明らかにアンティオコス・エピファネスによるエルサレム神殿略奪(紀元前168年)のことである。従って7章と8章に出てくる「一本の小さな角」はエピファネスを指し、時期は少し異なるが二つの章をつないでいる。

9章は、8章との関係で言えば「ガブリエル」の登場と語りで関係しているものの、中心は預言者エレミヤの告げた「七十年」という数字の解釈にあり、前後関係は必ずしもスムーズではない。おそらくは、8章との関係が深い10-12章を前にして若干の変化をもたらそうと意図しているのだと思われる。それは預言者の言葉の再解釈であり、その必要があったのは、8章の終わりでのその幻の意味を理解していない人の祈りに答えることであつたと思われる。しかし、この預言の「再解釈」というのは黙示文学の特徴の一つであり無視できない箇所である。

10-12章は象徴的な幻ではなく、地上の王によって天が攻撃されることを描いている。そこには8章と同様に天使が登場するが(ミカエル)、その啓示はより歴史的な言及に富み、また終末に関しても詳しく述べられている。そして、12章のクライマックスで復活の啓示にいたるのである(12:1-3)。

最後の 12 章は 7 章以下の一連の幻の結びであると同時に、特に 1 章との関連においてダニエル書全体の結びとしての機能も果たしている。それは 12:4 の「ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい」という言葉があるからだけではない。死からの復活の中で輝く「目覚めた人々」(マスキリーム)という言葉(12:3)が、1 章ではダニエルたちの知恵ある姿を示すために用いられ(1:4)、また 11:33 及び 11:35 では、民を救いへと導く指導者たちを示す言葉としても用いられているからである。さらに、12:10 においても最後に「逆らう者はだれも悟らないが、目覚めた人々(マスキリーム)は悟る」と記されている。

以上の全体構成を表で示すと以下のようになる。⁽³⁾

I 物語	1:1-6:29
A 導入 ダニエルと三人の少年	1:1-21
B ネブカドネツアルの夢	2:1-49
C 燃える炉の中の三人	3:1-30
D 木についての夢	3:31-4:34
E 壁の文字	5:1-6:1
F ライオンの洞窟の中のダニエル	6:2-29
II. 幻	7:1-12:13
G 四頭の獣と人の子	7:1-28
H 雄羊と雄山羊の幻	8:1-27
I エレミヤの預言の解釈	9:1-27
J 終わりの時の出来事と救いの時	10:1-12:13

言語上のインクルージオ：A(ヘブライ語)→BCDEFG(アラム語)←HIJK
(ヘブライ語)

内容上のキアスムス ①B→②C→③D ⇔ ③E←②F←①G

四 歴史的な設定

黙示文学の場合、その表面上の歴史的な設定と、実際にその文章が成立した時代を常に区別しなければならない。それはダニエル書に関しても同様である。例えば、バビロンの宮廷（紀元前6世紀前半）に仕えていたダニエルは、1:21においては「キュロス王の元年まで仕えた」と記されているが、6:29では「ペルシャのキュロスの治世を通して活躍した」となっている。また、2章においては既に「四つの王国」ということが暗示されているが、それは対応する7章の叙述を参照するならば、バビロン、メディア、ペルシャ、およびギリシア（紀元前4世紀以降）のことである。その時代のことまでダニエルが予見できると考えるのには無理がある。ダニエル書の場合、物語部分において、また幻の部分においても「事後預言」ということを考えるのが妥当である。特に物語部分においてはその「文学的虚構性」によって何が語られようとしているかが問題の焦点である。

物語（1-6章）におけるダニエルは一つの模範的な姿を提示している。それは、異教の王に仕えつつもその宗教的アイデンティティーを保持するということである。このことが問題となるのはバビロン捕囚以降であるが、前述の「四つの王国」という図式を考慮に入れるならば、その後のペルシャ時代はもちろんのこと、ギリシア時代までを成立年代設定の視野に入れる必要がある（なお二番目のメディアの史実性は支持されない）。しかし、他方、物語部分は、アンティオコス・エピファネスの時代を知らない段階にある。むしろ2章の「ネブカドネツアル」は最後にはダニエルを拝し、その神を讃えている。また5章の「ペルシャツアル」もダニエルの批判を受け入れている。さらに6章の「メディアのダレイオス」もダニエルの信仰と神による救いの出来事の故に、ダニエルの神を讃えている。このようなことは、アンティオコス・エピファネスの時代には想定できない。従って物語部分の成立はギリシア時代であり、紀元前3世紀から2世紀初頭であると考えられる。もちろん、これらの物語には前史がありそれはペルシャ時代にまで遡ることができるであろう。

物語部分の著者（複数）に関しては様々な議論や想定がこれまでなされてきた。1章においてダニエルたちは「何事にも才能と知恵があり、知識と理解力に富み、宮廷に仕える能力のある少年」（1:4）とあるので、物語の著者も何らかの知恵の伝統の中で教育を受けた者であり、しかも上流階級に属するものであると思われる。また「夢を解く」ことができるということは、古代世界においては政治にも携われることを意味している（「ヨセフ物語」を参照）。そのように考えるならば、宮廷物語の著者（ないし編者）は、異教世界においてそこを支配する王を認めつつ仕え、しかし神への信仰を貫くユダヤ人層に属すると言える。

以上のように物語部分の歴史的背景は広範囲に及ぶが、他方、7章以下の幻の部分はかなり正確にその成立年代を決定することができる。とりわけ11章において、アンティオコス・エピファネスの死が語られているが（11:45）、しかし、それはまだ現実とはなっていない。すなわち、幻の部分は激しいユダヤ人への迫害期に記されているが、まだそれは終結に至っていないのである。そうすると、その成立年代は紀元前168年のエルサレム神殿略奪から164年の奪還までの期間と考えられる。ただし、アラム語で書かれている7章は、その神殿への冒瀆を示唆していないので、迫害は激しくはなっているが、ヘブライ語部分よりは少し前に書かれたと推測される。

幻の部分の「わたしダニエル」は、自らを「いと高き者の聖者ら」（7:22）あるいは、迫害期に活躍する「民の目覚めた人々」（マスキリーム）と重ねあわせているように思われる（11:33、35）。この人々は、1:4のダニエルたちのように知恵と知識に長けた者たちであり、民の指導者である。その点で物語部分のバビロン捕囚期とギリシア時代の迫害期が関係づけられている。しかし、決定的な違いは、当然のことながら幻の部分がギリシア時代について詳しい知識を持っていることと、神話的なイメージによく通じていることである。

そこから幻の部分の著者像を正確に描くことができるであろうか。この点について、従来から、イスラエルの知恵の伝統との繋がりが指摘されてきた。このことはこれまで述べてきた「ダニエル像」から推定されるものであるが、そ

れだけでは決定的とはいえない。前述のように知恵と黙示の関係は大きな課題である。他方、イスラエルの預言者の伝統との関係が多く研究者によって指摘されてきている。それは具体的にはエゼキエル書やゼカリヤ書後半の「幻」との共通性や、ダニエル書9章の「エレミヤの預言の再解釈」から推定されることである。しかし、預言と黙示の関係もまた大きな問題であり、テキストに基づいた厳密な検証が求められる。

いずれにせよ、ダニエル書が現在の最終形態をとったのは、アンティオコス・エピファネスの時代であり、宮廷物語はその前史をもっているが全く新しい状況の下で解釈され、それが幻の部分と結び合わされて、異教の王による迫害に対して抵抗する文学として成立したと考えられる。そのことはダニエル書全体の神学的・思想的内容と密接に関係している。

五 思想・神学

ダニエル書の思想と神学を説得的に提示するためには、それが「黙示文学」という一つの文学類型をなしているとは言え、具体的な個々のテキストの分析を経なければならない。とりわけ、ダニエル書は1-6章の宮廷物語の部分と、7-12章の幻の部分は様式上、かなり明確に分かれているので、それぞれの代表的な部分を取り上げその文学的構造とテーマを明確にする必要がある。以下、物語部分の冒頭の第1章と、幻の部分の冒頭であり、かつ二つの部分を繋げる機能を果たしている第7章を取り上げてみたい。

(1) 1章の文学的構造とテーマ

まず第一に注目すべきことは、何回も繰り返される称号ないし固有名詞である「ネブカドネツアル」という固有名詞は2回だけ用いられているに過ぎないが(1、18節)、「王」という称号は15回用いられている。それに対して、ダニエルは常に固有名詞で呼ばれ、それは9回に及ぶ。代名詞を用いない書き方には、書き手の何らかの意図が示されていると言えよう。しかし、いずれにせよ、この章で明確な形で対峙しているのは「ネブカドネツアル」と「ダニエル」

である。また、第二に注目すべきキーワードは「宮廷の肉類と酒」という言葉である。若干のヴァリエーションはあるが、5回繰り返されている。(5、8、13、15、16節)。この「宮廷の肉類と酒」が何を意味するかに関しては議論がある。何らかの仕方で偶像礼拝と結びついた食べ物や飲み物を指すという説もあるが、おそらくは、異国の王との共同の食卓と関係し、それを食べることによって契約関係に入ることを意味していたと思われる。K. コッホは「ダニエルは、王との共同の食卓に関わることで、神との関係が薄れることを自分のため、また友のために避けようとしたのである。大権力を有する王との共同の食事は、身を汚すからである」と指摘している。⁽⁴⁾

以上の二点から、一章の文学的構造はかなり明らかである。すなわち、ここで対峙しているのは、異教の王ネブカドネツアルと、敬虔な信仰をもつユダヤ人ダニエルである。そして、ネブカドネツアルはダニエルをはじめとする四人の少年を文化的に同化させようとする。その一つは名前の変更である(7節)。四人の新しい名前はアッカド語に基づくもの、つまりバビロン風のものである。しかし、ダニエルはその同化を最終的には拒否しようとする。それは自らのユダヤ人としての宗教的アイデンティティーを保持するための態度決定である。また「宮廷の肉類と酒」を口にしないように知恵を働かせるのは、その具体的な表れである。すなわち、ネブカドネツアルの同化政策とダニエルの宗教的アイデンティティー保持のための戦いが、一章の文学的構造を決定している。それは以下のような構造になっている(K. コッホの構造分析を参照した)。⁽⁵⁾

枠組 王の名前、時、場所、神の処置 (1、2節)

1 王の役人への命令 (3-5節)

2 ダニエルと王の役人との会話 (6-17節)

—王の命令の実行結果—

A a 少年たちの採用 (6節)

b 王の側の意図(文化的同化)とダニエルの意図(宗教的距離の保持)

(7-8節)

<神の介入> (9節)

c ダニエルの願いの拒絶 (10 節)

B a ダニエルの世話係への語りかけと、世話係の仮の譲歩 (11-15 節)

b 最終的な譲歩とダニエルたちの結果 (16 節)

<神の介入> (17 節)

3 ダニエルと王との出会いと緊張の解消 (18-20 節)

枠組 新しい王の時代 (21 節)

この構造分析によれば、最も重要な転換点において、「神の介入」(9、17 節)が記され、中心的なテーマとなっていることが分かる。すなわち、文化的同化を実際に実行する侍従長は、「神の計らいによって」ダニエルに好意を示す(9 節)。また、四人の少年たちの知識と才能、また文書能力や知恵は、バビロンの宮廷教育によって与えられるのではなく、「神が与え」たものであった(17 節)。ここに 1 章の著者の主張が明確に示されている。そして、この「神の介入」という事態は、このあとに続く物語部分の主要テーマとなっていくのである(2:29、47、3:28、4:31、34、5:24、6:23、等)。

(2) 7 章の文学的構造とテーマ

この章の統一性と文学的構造に関しては、多くの議論がなされてきている。とりわけ 8-11 節 a に関しては、編集者による付加であるという見解が述べられてきた。しかし、そうすると、「一本の小さな角」に関わる 20 節 b、21-22 節、24 節 b-25 節も二次的とせざるを得なくなり、7 章には全くアンティオコス・エピファネスを示唆する部分はないことになる。これは同じアラム語で記されている 2-7 章との緊密な歴史的関係を重視した結果であり、それによって前述したような 7 章のダニエル書全体における「結び目」としての機能を見捨てることになる。また、8 章以下のアンティオコス・エピファネスによるユダヤ人迫害に焦点を絞った「幻」の部分から、同じ「幻」の様式をもっている 7 章を完全に切り離してしまうことにもなる。

このような通時的分析は、黙示文学としてのダニエル書の各章およびテキストを分断し、その思想と神学の理解を困難にすると考えられる。それに対して 7 章を、黙示文学特有の「天と地、すなわち上と下、彼岸・此岸を含む世界観、

時間的・空間的に広がりをもつ宇宙論的二層の世界観」(西村俊昭)⁽⁶⁾を示すものと捉えるならば、ことのほか明確な文学的構造を見出すことができると思われる(前述のJ.J. コリンズの黙示文学の定義を参照)。

この7章は導入(1節)と結び(29節)を枠組みとし、「天」と「地」のことが相互に関係づけられて交互に叙述されている。またその各単位には「わたしがなお見ている」というフレーズがほぼ同様に繰り返されている。その構造を示すならば以下になる。

導入	日付	幻	夢	(1節)
A	海から、四頭の大きな獣が現れる	(2-8節)	<地>	
	「わたしがなお見ていると」	(4節)		
B	「日の老いたる者」、王座に座す	(9-10節)	<天>	
	「わたしがなお見ていると」	(9節)		
C	第四の獣が殺される	(11-12節)	<地>	
	「わたしがなお見ていると」	(11節)		
D	「人の子」のような者が天の雲に乗り	(13-14節)	<天>	
	「わたしが(夜の幻を)見ていると」	(13節)		
E	一人の人によってダニエルに解釈が与えられる	(15-22節)	<地>	
	「わたしが見ていると…やがて」	(21-22節)		
F	その人による幻の補足的説明	(23-27節)	<天>	
結び	その言葉の終わり	(28節)		

このような「天と地」の交差は、8章にも見られ、基本的には7-12章の幻の部分の叙述を方向づけている。そこで対峙しているのは7章で言えば、「日の老いたる者」および「人の子のような者」と、第四の獣の十本の角からさらに生えてくる「一本の小さな角」である。「一本の小さな角」のことは、AとCとE、さらにFにおいて言及され、「尊大なことを語る王」と言われ、Eにおいては「大きく」なっている(20節)。これはアンティオコス・エピファネスのことを示唆している。それに対して「日の老いたる者」はBとDにおいて言及され、Eにおいてはついにその「一本の角」を裁くことになる。「日の

老いたる者」とは神を指す呼称である（詩編 55:20 を参照）。また D に出てくる「人の子のような者」とはその代理者であり、すべての世界の諸国を永遠に支配する存在である。それは<地>においては「いと高き者の聖者たち」（E および F）と対応している。このような「天と地」という垂直的な表象は、とりわけ 7 章以下の幻の文学構造を規定し、そのテーマを明確にしている。

(3) ダニエル書の思想的・神学的特徴

以上のようにダニエル書はその物語部分と幻の部分ではかなり文学的様式を異にしている。しかし、全体として迫害下にある敬虔なユダヤ人を励まし慰める目的で書かれ、最終的に現在の形態に編集されている。それぞれの部分に用いられている文学的技法の相違は、コンテクストの違いから来ている。1-6 章においては、ユダヤ人としての宗教的アンデンティティーを保ちつつ、異教徒の王に仕えることはいかにして可能かということが問題とされ、それは<神の介入>によるというメッセージが込められている。しかし、7-12 章においてはそのような楽観論は姿を消し、異教徒の王の支配と神の支配は和解不可能であり、その問題は「一人の人」（7 章）「ガブリエル」（8 章、9 章）「ミカエル」（10-12 章）などの天使たちによって開示される超自然的な世界（=天）に求めなければならないことが示される。そして奇跡的に死を免れるのではなく、死後の復活によってその究極的な解決を得ることができると告げられているのである（12:1-3）。

(4) 預言からの黙示理解、知恵からの黙示理解

黙示の起源に関しては、この両者が常に議論の対象になってきているが、現在のところコンセンサスはない。預言から理解する者は、例えば第三イザヤ（56-66 章）においてその展開が見られると言う（P. D. ハンソン）。⁽⁷⁾ すなわち預言者の終末論の場合は、「天上の会議での神の計画」ないし「宇宙的ヴィジョン」が地上の人間の歴史的現実には翻訳されるが、黙示的終末論の場合は歴史の言葉に直接的には翻訳されず、間接的に人間の現実と関わりをもつものとされる。

他方、知恵から理解する者は、知恵文学と黙示文学は、地上における空間的・時間的問題が天上一地上の相即の戦いに移行し、共に「宇宙論的確信を有する」

という点において共通すると言う。⁽⁸⁾ その場合、救いとはその宇宙論的世界秩序に関する新しい理解であり、それへの適応である。

この黙示の起源の問題は依然として未解決であるが、「黙示的終末論」でなく文学類型としての「黙示文学」の場合は、知恵の伝統との親和性がより強いと言えよう。したがって、ヘブライ語正典においてダニエル書が「諸書」に位置づけられていることは正当性をもつと思われる。この黙示文学と知恵文学との関係に関してはまた稿を改めて論じることとしたい。

注

- (1) P. D. Hanson による「黙示」に関する事典項目参照。 *IDB*, Supplementary Volume, 1977, pp. 27-34. *ABD I*, 1992, pp. 279-282.
- (2) John J. Collins, *DANIEL*, The Forms of the Old Testament Literature, Volume XX. 1984, p.27ff.
- (3) J. J. Collins の構成分析に基づき一部を変更した。 *Ibid.*, p. 31.
- (4) Klaus Koch, *Daniel*, Biblischer Kommentar Altes Testament XXII 1, 1986, p.63.
- (5) *Ibid.*, p.16.
- (6) 西村俊昭、『旧約聖書における知恵と解釈』、創文社、2002 年、88 頁。
- (7) P. D. Hanson, *The Dawn of Apocalyptic*, Fortress Press, 1979.
- (8) 西村俊昭、前掲書、76 頁。